

幼児の動物の死の概念と、ペットロス経験後の 生命観の変化に関する研究 — 幼児の死の概念とペットロス経験の関連 —

清泉女学院大学 濱野 佐代子

Studies on Young Children's Concept of Death of Pet and on the Changes in the View of Life after Experiencing Pet-Loss. -The concept of death in early childhood related experiencing pet-loss-

Seisen Jogakuin College

HAMANO, Sayoko

要 約

近年核家族化が進み、子ども達が家庭内で近親者の死を経験することはほとんどなくなってきた。しかし、子ども達が親密なペットの死を経験することは、死を理解すること、いのちの大切さを実感する重要な経験であると考えられる。そこで、幼児のペットとの死別（ペットロス）経験と死の概念（非可逆性、普遍性、生命機能の停止）の発達との関連、幼児のペットロス経験による人格的発達を検討することを目的として本研究を行った。3～6 歳児 60 名を対象に面接調査と、幼児の保護者 63 名を対象に質問紙調査を行った。その結果、ペットロス経験がある幼児は経験のない幼児よりも非可逆性を理解している者が多いことが明らかにされた。また、幼児がペットと親密であるほどペットロス経験による人格的発達を遂げると両親は認識していることが示された。以上から、3～6 歳児の幼児の場合は、死の概念の理解の発達には、ペットロス経験のような実際の死別経験が関連していることが示唆された。

【キー・ワード】 幼児, ペットロス, 死の概念, 人格的発達, 実体験

Abstract

As the trend of nuclear families is increasing in these years, children rarely experience the death of their close relatives. Therefore, experiencing the death of close pets could be an important factor for children to understand the death and to realize the value of life.

The purposes of this research are to study the interrelation between the children's pet-loss experience and the development of their concept of death (irreversibility, universality and cessation of vital function), and to discuss the personality development of children by experiencing pet-loss. In order to establish this study, interviews for 60 young children between the ages of 3-6 and questionnaires for 63 parents were carried out.

As the result, the children who had experienced pet-loss showed their understandings against irreversibility more than the others. Additionally to this, it was revealed that the parents became more aware of that the closer relationship with pets the children had, the more the experience of pet-loss contributed to their personality developments.

Consequently, this study indicates the real pet-loss experience relates to the development of understanding of the concept of death in the case of the children between the ages of 3-6.

【Key words】 Young children, Pet-loss, Concept of death, Personality development, Real experience

問 題

最近、命を軽視したような青少年の犯罪が増加し、いじめや自殺の問題も深刻化している。そのような社会背景の中、子どもに対する「いのちの大切さ」の教育の必要性が問われている。しかし、「いのちの大切さ」を教育によって子ども達に教えることが可能であるのだろうか。例えば、いのちの大切さについて話し諭したり、本を読み聞かせたりするだけでは、子どもたちはいのちを大切にしなければならないということを実感できないのではないだろうか。「いのちの大切さ」の教育は保育機関や学校の中で行うことに限界がある。なぜなら、「いのちの大切さ」は、親しい者の死と対面するような経験を経てこそ実感できると考えられる。

しかし、近年、核家族化が進み、子ども達が家庭内で近親者の死を経験することがほとんどなくなってきた。また、終末期を病院で迎える人が多く、子ども達が死に立ち会うことが少なくなってきた。子ども達が親密な対象の死を経験することは、死を理解することや「いのちの大切さ」を実感する重要な経験であると考えられる。このような現状の中、矛盾しているが「いのちの大切さ」は保育や教育の場面で取り入れざるを得ない状況となっている。では、「いのちの大切さ」を子ども達に伝えるにはどのようにすればよいのだろうか。最近の研究では、死別のようなストレスフルな経験が、死や命について考えたり人格的成長をもたらしたりすることが明らかにされている (Deeken, 1983 ; 東村ら, 2001 ; Tedeschi, 1996 ; et al)。つまり、人間が生きている以上避けられない死別経験こそが、死を考え「いのちの大切さ」を実感できる機会になるのではないだろうか。そこで、本研究では、子どもの死の遭遇経験について調査し、死の概念や人格的発達への影響について検討し、いのちの大切さを考える機会としたい。

目 的

子どもが、死ぬということを理解するのはいつごろからののだろうか。死を理解することにはまず、死の概念の獲得が考えられる。Speece ら(1984)は、子どもの死の概念の発達について、irreversibility (非可逆性), nonfunctionality (普遍性), universality (生命機能の停止)の3つの死の概念の要素を挙げている。そして、先行研究を論じ5歳~7歳でこの3つの要素を理解する

としている。また、日本においても、仲村（1994）がこの3つの死の概念の要素を用いて年齢区分別に調査を行い、5歳と6歳の間に大きな変化があり、6歳～8歳で3つの死の概念を理解するとしている。以上の研究は、不特定多数の死を題材に行っている調査であった。このような研究方法は、条件は統制できるが、幼児が死を身近な出来事として捉え難いとも考えられる。一方、竹中ら（2004）は、絵本を用いて死の概念の獲得に関する調査を行い、死の不動性（生命機能の停止）は4歳7ヶ月、死の不可逆性は3歳9ヶ月から理解し始め、6歳前後でほとんどの幼児が理解するとし、死の普遍性は4歳3ヶ月から理解し始め6歳2ヶ月以上でほとんどの幼児が理解するとしている。このように、竹中ら（2004）の研究において、他の先行研究よりも早い時期に死の概念を理解するという結果が得られたのは、具体的な題材を用いることによって、死を想起しやすく幼少の幼児にも分かりやすい質問であったことが要因として考えられた。

そこで本研究では、身近な出来事として想起しやすく幼児の死の概念の実体像を捉えるために、幼児のペットとの死別（ペットロス）経験を対象として調査を行った。ペットの死は、幼児が近親者の死よりも多く遭遇すると考えられ、幼児が親近感を抱いているペットとの死別を対象とすることにより、死を身近に起こった出来事として捉えるため想起しやすいと考えられるためである。死の概念の理解の指標としては、Speeceら（1984）や仲村（1994）の3つの死の概念を使用した。本論文では、irreversibilityを「非可逆性」、universalityを「普遍性」、nonfunctionalityを「生命機能の停止」と訳した。前述の諸研究から、死の概念の獲得に関して大きな変化年齢と考えられる3歳～6歳の幼児を対象に、死の概念の発達について明らかにするために面接調査を行った。さらに、死の概念の発達にはどのような要因が関連するのかを検討した。また、ペットロス経験による人格的発達について両親がどのように捉えているかを明らかにするために質問紙調査を行った。さらに、幼児とその両親の調査から、ペットロス経験による人格的発達について検討した。

本研究では、動物の死の概念の発達とペットロス経験による人格的発達を明らかにすることを目的として調査を行った。

方 法

3～6歳児60名を対象に面接調査を行い、幼児の両親63名を対象に質問紙調査を行った。以下に面接調査と質問紙調査の調査協力者、期間、測定方法、内容を分けて記載する。

I 幼児の面接調査

1. 調査協力者

私立S幼稚園で調査を行った。対象となった園は特に宗教はない。当園に通っている3～6歳児のうち、園長先生が「先生のお友達のお手伝いでお話してくれる人はいますか」と尋ね、同意が得られた60名を対象とした。

幼児の調査協力者は、男児28名、女児32名であった。また、各年齢クラスは、3歳児クラスは2名（40～43ヶ月齢、平均月齢：41.5ヶ月齢）、年少は4名（44～55ヶ月齢、平均月齢：52ヶ月齢）、年中は18名（57～67ヶ月齢：平均月齢：61ヶ月齢）、年長は36名（68～78ヶ月齢、平均月齢：73ヶ月齢）であった。

月齢)であった。全体の平均月年齢は、67ヶ月齢(SD=8.9)であった。

2. 調査期間

2007年11月

3. 測定方法

半構造化面接調査を行った。当園内の一室で個別面接を行った。面接者は著者自身である。子どもたちと面識はないが、日常的に関わっている園長先生からの紹介という形のラポールをとった。面接時間は平均約3~5分であった。会話は面接中に逐語をノートに記録し、当日中に逐語録データを作成した。

4. 調査内容

(1) 幼児の死の概念に関する質問項目

1) 幼児に死を想起させるために、ペットもしくは動物の死に遭遇した経験を尋ねた。具体的には、幼児の死の遭遇経験を以下の3通りの方法で選択した。優先順位はABCの順であり、どれか一つの死の遭遇経験を対象とした。

A「ペットロス経験群」

家でペットを飼っていたかを聞く。具体的な質問は「おうちで犬とか猫とかウサギとか金魚とか虫とか、飼ったり、持ってたことがあるか」と過去形で聞き、幼児が死んだペットについて自ら語る場合は、そのままその死んだペットを対象に面接を進める。もし、その動物の生死が不明な場合は、「今もおうちにいるのか」と追加質問を行う。ペットが生きている場合は、過去にペットの死に遭遇したことがあるかを尋ねる。ペットロス経験がある場合は、その死んだペットを対象に面接を行う。以上の質問方法は、調査者が死の情報を与えずに幼児が自らペットの死を語ることを促すためである。ペットロス経験がない場合は、次のBやCへと移行する。

B「動物の死経験群」

ペットロス経験がない場合は、動物の死の遭遇経験の有無を聞く。具体的には、「死んじゃった動物とか虫とかみたことあるか」と尋ねる。動物の死に遭遇した経験がある場合は、その死んだ動物を対象に面接を行う。

C「動物の死未経験群」

ペットロス経験や動物の死の遭遇経験がない場合は、「死ぬってどういうことかな」と聞いて面接を進める。

2) 動物の死に関する質問項目

死に関する語りがある場合は、原則的には幼児がそのエピソードについて自由に語るのを促す。その際、以下の点に留意して面接を行う。死についての語りがない場合は、右記の例のように質問する。これらは、A「ペットロス経験群」、B「動物の死経験群」の場合の質問項目である。

- | | |
|--------------------|--------------|
| ①死の場面状況に関するもの | 例) その時どうしたのか |
| ②死に遭遇したときの感情に関するもの | 例) その時どう思ったか |
| ③死の原因 | 例) どうして死んだのか |

3) 死の概念に関する質問項目

仲村（1994）の3つの死の概念に関する質問をもとに作成した。また、濱野（2007）で得られた死後の推測に関する質問項目を加えた。これらは、A「ペットロス経験群」、B「動物の死経験群」、C「動物の死未経験群」の共通質問項目である。

- ①非可逆性 例)「その死んだ動物は生き返るか」
- ②普遍性 例)「その死んだ動物のように人間とか動物とか、いつかは死ぬのか」
あいまいな場合は、「死なない人はいるのか」の追加質問
- ③生命機能の停止 例)「その死んだ動物は動いたり見たり聞いたり感じたりできるのか」
- ④死後の推測 例) そのペットは今どうしているのか

(2) 幼児とペットとの関係に関する質問項目

ペットロス経験があるA「ペットロス経験群」に対しては、生前のペットとの関係を以下の項目にしたがって質問した。質問 2)～8)にあると回答した場合は、各質問項目の右記の質問を行った。下記の 2)～8)は幼児と園内飼育動物との関係の項目（濱野；関根，2005）をペット用に改訂したものである

- 1) そのペットはどんなペットだったのか
- 2) ペットに触ったり、抱っこしたことがあったかなかったか→どういう気持ちになったか
- 3) ペットのことは好きだったか嫌いだったか→好き/嫌いなのはどうしてか
- 4) ペットにエサをあげたり、世話をしたりすることはあるか→エサをあげたり、世話をしたりするのは好きか嫌いか、それはどうしてか
- 5) ペットと遊んだことがあるか→何をして遊んだのか。どう思ったか、どう感じたか
- 6) おかあさんやおとうさんと、ペットのお話をしていたか→どんなお話をしたか
- 7) ペットはいつも何かを考えていたかいなかったか→どんなことを考えていたと思うのか
- 8) ペットとお話したことがあったか→どういうお話をしたのか
- 9) その他 そのペットに名前をつけていたかどうかを質問した

II 両親の質問紙調査

1. 調査協力者

私立S幼稚園で調査を行った。各クラスの担任保育士が園児に質問紙を配布し、任意で一週間以内に園に保護者か園児に持参してもらい回収した。回収率は約 19%であった。協力者は、当園に通う幼児の両親 63名であった。父親 29名（26～48歳，平均年齢：34.8歳，SD=5.1），母親 34名（27～47歳，平均年齢：33.8歳，SD=4.5）であった。父親の職業は、会社員が 72.4%，公務員 10.3%，その他が 17.2%であった。母親の職業は、会社員が 8.8%，専業主婦（パートも含む）が 91.2%であった。

2. 調査期間

2007年11月

3. 測定方法

S幼稚園に通う幼児の両親を対象とした質問紙調査。

4. 調査内容

(1) 調査協力者の属性

- 1) 調査協力者の属性と子どもの属性と家族構成（家族成員数，家庭内の子ども数）。
- 2) 家庭内の死の教育実施の有無とその理由（自由記述）。

(2) 動物の死の経験による人格的発達に関する項目

濱野（2007）の「ペットロス経験による人格的発達」の尺度の第1因子の9項目である（以下は「動物の死の経験による人格的発達」と表記する）。回答方法は、4段階評定法（非常にあてはまる，かなりあてはまる，ややあてはまる，あてはまらない）である。教示は、「あなたのお子様が，動物の死を経験することは，下記の質問にどのくらいあてはまると思いますか」であり，ペットだけではなく対象を動物とした。

(3) 子どものペットロス経験に関する項目

子どもの動物の死の経験の有無について2件法で回答してもらった。また，ペットロス経験のある場合は，そのペットの種類について単一回答法にて回答してもらった。多数のペットロスの経験がある場合は，一番最近の動物の死を対象に回答してもらった。

(4) 子どもと喪失したペットとの親密性に関する項目（以下は「ペットとの親密性」と表記）

質問は6項目であり，回答方法は，5段階評定法（あてはまる，ややあてはまる，どちらともいえない，あまりあてはまらない，あてはまらない）である。

III 分析方法

分析の統計処理は，SPSS for Windows ver.13.0を使用した。幼児の面接調査では，死の概念の発達と関連する要因の検討を行った。また，幼児の面接調査の語りと両親の質問紙調査から，ペットロス経験による人格的発達の検討を行った。

IV 倫理的配慮

調査実施に関して，事前に本研究の目的と方法を調査先である幼稚園の先生方に十分に説明し，調査の実施の協力を得た。日本発達心理学会の倫理（2000）に従い，インフォームド・コンセント，プライバシーの保護，研究結果のフィードバックに留意し研究を行った。さらに，死の経験を扱う研究となっているため，幼児に悪影響を及ぼさないために，臨床心理士の資格を持った著者が面接を担当し，面接後フォローが必要なケースがある場合に対応した。また，面接の最後に「おおきくなったら何になりたいか。」という質問を行い幼児が楽しい気持ちで面接を終了できるように工夫をした。

結 果

I 幼児の面接調査の結果の分析は，1. 幼児の死の概念の基本的データ，2. 死の概念の理解に関連する要因の抽出，3. 3つの死の概念を全て理解していた幼児の特徴の順に行った。

1. 幼児の死の概念の基本的データ結果

幼児の死の遭遇経験は、A「ペットロス経験群」が36名、B「動物の死経験群」が11名、C「動物の死未経験群」が13名であった。喪失ペットの種類は、カブトムシ、クワガタやカマキリなどの昆虫類が19、金魚が6、犬が3、猫が3、ウサギ1、ハムスター1であった。その他に知人の死の経験を挙げた幼児が3名いた。

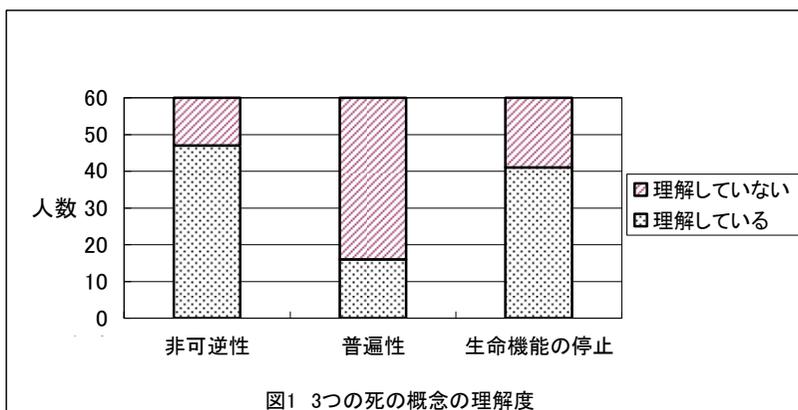
動物の死に関しては、動物の死の状況について詳細に感情を交えながら語る幼児と、動物の死の状況をほとんど語らない幼児がいたため2群にわけた。その結果、死の詳細な語りをした幼児が16名、ほとんど語らなかった幼児が44名であった。死に遭遇したときの感情について語った幼児は21名で、「かわいそう」が13名、「悲しい」が3名、「忘れた」が3名、「泣いた」が1名、「おもしろい」が1名であった。死の原因について語った幼児は30名おり、2つの原因を語った幼児が3名いた。「分からない」が11名、「病気」が4名、「エサがなかった」が3名、「年をとったから」が3名、「轢かれた」が3名、「殺された」が2名、「喧嘩」が2名、「ちぎれた」が2名、「自分の責任」が1名、「世話をしなかった」が1名、「なにもしないのに死んだ」が1名であった。

3つの死の概念の理解については、非可逆性を理解している幼児は47名（40～78ヶ月齢、平均月齢：67.3ヶ月、SD=9.1）、理解していない幼児は13名（55～78ヶ月齢、平均月齢：65.6ヶ月、SD=8.2）であった。普遍性を理解している幼児は16名（55～78ヶ月齢、平均月齢：65.8ヶ月、SD=8.0）、理解していない幼児は44名（40～78ヶ月齢、平均月齢：67.4ヶ月、SD=9.2）であった。生命機能の停止を理解している幼児は41名（40～78ヶ月齢、平均月齢：66.8ヶ月、SD=9.2）、理解していない幼児は19名（44～78ヶ月齢、平均月齢：67.4ヶ月、SD=8.5）であった（図1参照）。また、3つの死の概念の理解の組み合わせと理解した幼児の人数を表1に示す。非可逆性を理解している幼児が多く、次に生命機能の停止、普遍性と続いた。

ペットロス経験のある幼児36名においては、「幼児とペットとの関係」に関する9つの質問項目の回答から、親密性を総合的に判断し高低群に分けた。高低群の分類は心理学研究者2名で検討して行った。その結果、親密度高群は9名、低群は26名、不明が1名であった。

表1 3つの死の概念の理解度

理解している概念	人数
非可逆性・普遍性・生命機能の停止	10
非可逆性・普遍性	0
非可逆性・生命機能の停止	25
普遍性・生命機能の停止	2
非可逆性	12
普遍性	4
生命機能の停止	4
理解している概念なし	3
合計	60



2. 死の概念の理解に関連する要因の抽出

年齢、ペットロス経験、死の状況の語りと死の概念の理解との関連について分析した。さらに、ペットロス経験のある幼児は親密度との関連について分析した。

(1) 年齢と死の概念の理解との関連

死の概念を理解している幼児の年齢区分や平均月齢をみても年齢との関連は認められないと考えられた。また、3つの死の概念について、理解の有無で2群に分け独立変数とし、幼児の月齢を従属変数としてt検定にて平均の差の検定を行った結果有意差は認められなかった。

(2) ペットロス経験の有無と死の概念の理解との関連

ペットロス経験の有無と3つの死の概念の理解の有無の関連を検討するために、人数に偏りがあるかについてPearsonの χ^2 検定を行った。結果、有意差が認められたのはペットロス経験の有無と非可逆性の理解の有無であった ($\chi^2(1)=3.2, P<.10$)。結果を表2に示す。

表2 ペットロス経験の有無と非可逆性の理解のクロス表

	理解している	理解していない	合計
ペットロス経験あり	31	5	36
(ペットロス経験ありの%)	86.1	13.9	100
(非可逆性の%)	66.0	38.5	
ペットロス経験なし	16	8	24
(ペットロス経験なしの%)	66.7	33.3	100
(非可逆性の%)	34.0	61.5	
合計	47	13	
(非可逆性の%)	100	100	

(3) 死の状況の語りの有無と死の概念の理解との関連

死の状況の語りの有無と3つの死の概念の理解の有無の関連を検討するために、人数に偏りがあるかについて Pearson の χ^2 検定を行った。結果、有意差が認められたのは死の状況の語りの有無と普遍性の理解の有無であった ($\chi^2(1)=9.8$, $P<.01$)。結果を表3に示す。

表3 死の状況の語りの有無と普遍性の理解のクロス表

	理解している	理解していない	合計
死の状況の語りあり	9	7	16
(死の状況の語りありの%)	56.3	43.8	100
(普遍性の%)	56.3	15.9	
死の状況の語りなし	7	37	44
(死の状況の語りなしの%)	15.9	84.1	100
(普遍性の%)	43.8	84.1	
合計	16	44	
(普遍性の%)	100	100	

(4) 幼児とペットの親密度高低と死の概念の理解との関連

ペットとの親密度高低と3つの死の概念の理解の有無の関連を検討するために、人数に偏りがあるかについて Pearson の χ^2 検定を行った。結果、有意差が認められなかった。

3. 3つの死の概念を全て理解していた幼児の特徴

3つの死の概念を全て理解していた幼児は9名いた(表4参照)。共通することは、全員がペットや身近な人の死別経験をしていた。また、9名のうち7名が死の原因を言及していた。死の原因を語った幼児は全体の50%であったことと比較しても多い割合であった。

また、死に関する語りでは、「わんちゃん寝てる時死んでた。おとうさん見せてくれた。かわいそうだった。箱に入れて、大きな毛布みたいなものをかぶせておいた。犬の神社と一緒にいった(63ヶ月齢女兒)」、「病院から電話かかってきて、ママ泣いてた。なんで泣いてるのって聞いたら、ママがねこちゃん死んだって行ってわかった。ねこちゃんのことママは大好きだった。泣いているママをみて悲しかった(74ヶ月齢女兒)」などがあり、死の場面の状況や悲しみ、周囲の大人の反応を詳細に語っていた。

表4 3つの死の概念に正当した幼児(喪失経験あり)

性別	月齢	喪失対象種類	死後の推測	死の原因	死に関する語り(例)
男	57	ハムスター	土に戻る	猫に殺された	ムシに食べられている。ずーっと、食べられて化石になる。
女	69	身近な人	わからない		
男	68	カブトムシ	救急車で病院	ちぎれた	
女	73	ザリガニ	土の中にいる	世話をしないから	
女	63	犬	わからない	年をとったから	わんちゃん寝てる時死んでた。おとうさん見せてくれた。かわいそうだった。箱に入れて、大きな毛布みたいなものをかぶせておいた。犬の神社と一緒にいった。
女	74	猫	天国に行った	病気	病院から電話かかってきて、ママ泣いてた。なんで泣いてるのって聞いたら、ママがねこちゃん死んだって言ってわかった。ねこちゃんのことママは大好きだった。泣いているママをみて悲しかった。
男	69	クワガタ	土の中にいる	切れた	クワガタが、カブトムシに挟まって切れて死んだ。切れたから生き返らない。
男	55	友達の祖母	救急車で病院	車があたった	
男	61	金魚	わからない		

II 両親の質問紙調査の結果の分析は、1. 基本的データ、2. ペットとの親密性と動物の死の経験による人格的発達の関連の検討の順に行った。

1. 基本的データ結果

1) 属性

子どもは、男児41名、女児22名であった。また、各年齢クラスは、3歳児クラス4名、年少クラス22名、年中クラス17名、年長クラス22名であった。全体の平均月年齢は、64.63ヶ月齢(SD=10.0)であった。対象の子どもの出生順序は、第一子が63.5%、第二子が23.8%、第三子12.7%であった。家族成員の人数は、3人家族が12.7%、4人家族が36.5%、5人家族が25.4%、6人家族が12.7%、7人家族が4.8%、8人家族が7.9%であった。核家族が68.3%、三世代以上同居家族が31.7%

であった。家庭内の子どもの数は、1人が17.5%、2人が52.4%、3人が27.0%、4人が3.2%であった。ペットロス経験がある子どもは27名であった。そのペットの種類は犬が4名、ねこが4名、その他が21名であった。

2) 死の教育

家庭内で死の教育を行っている両親は18名いた。自由記述では、「飼育していたカブトムシが死んだ時、命には限りがあるのだから大切にしようという様な話をする（73ヶ月齢男児の母親）」、「猫が死んだ時には死について教えた（73ヶ月齢女児の父親）」などがあり、身近な動物やペットの死別経験を基に死の教育を行っていた。

2. ペットとの親密性と動物の死の経験による人格的発達に関連の検討

ペットロス経験のある幼児の両親27名を対象に分析を行った。まず、「動物の死の経験による人格的発達」の9項目と「ペットとの親密性」の6項目に関してそれぞれ因子分析を行い項目の構成を検討した。「動物の死の経験による人格的発達」の9項目に関しては、1因子を想定して因子分析（最尤法）を行った（表5参照）。濱野（2007）のペットロス経験による人格的発達の第1因子と負荷量は異なるが因子構造は変化しなかった。また、信頼性の検討として α 係数（Cronbach）による分析を行った結果、0.89と高い α 係数が得られた。「ペットとの親密性」の6項目を因子分析（最尤法）した結果、1因子構造であった（表6参照）。また、 α 係数（Cronbach）による分析を行った結果、0.92と高い α 係数が得られた。

表5 動物の死の経験による人格的発達の因子分析結果

	因子負荷量	共通性
⑧子どもは、家族を亡くした人の気持ちが分かるようになる	0.82	0.67
③子どもは、弱いものを気遣う気持ちが身につく	0.80	0.63
⑦動物を亡くす経験によって、子どもは成長する	0.76	0.59
⑥動物を亡くす経験は、子どもが死を学ぶのによいと思う	0.72	0.51
②動物を亡くす経験は、子どもの情操教育に役立つと思う	0.72	0.55
④子どもは、命の大切さを学ぶ	0.71	0.52
①動物を亡くす経験は、子どもの責任感の発達に役立つと思う	0.64	0.48
⑤子どもは、「死」ということについて考えるようになる	0.62	0.43
⑨子どもは、動物は天国で幸せにいらしていると思うだろう	0.46	0.27
固有値	4.85	
因子寄与	4.43	
累積寄与率（%）	49.22	
α 係数(Cronbach)	0.89	

左側の番号は質問項目番号

表 6 ペットとの親密性の因子分析結果

	因子負荷量	共通性
その動物とよく遊んでいた	0.90	0.77
その動物に親しんでいた	0.88	0.83
その動物とよく一緒にいた	0.86	0.74
その動物をよく触っていた	0.85	0.81
その動物の所によく行っていた	0.76	0.77
その動物の世話をよくしていた	0.64	0.52
固有値	4.33	
因子寄与	4.03	
累積寄与率 (%)	67.17	
α 係数(Cronback)	0.92	

次に、「ペットとの親密性」と「動物の死の経験による人格的発達」を各々合計し得点化した。そして、ペットとの親密性得点を説明変数、動物の死の経験による人格的発達得点を目的変数として単回帰分析（強制投入法）を行った結果、決定係数は 0.20 であり、標準回帰係数は 0.45 ($p < .05$) であり、有意な結果が認められた（図 2 参照）。このことより、ペットとの信頼性得点が高いほど、動物の死の経験による人格的発達得点は高くなることが示された。



決定係数 $R^2 = .20$

標準回帰係数 $\beta = .45$ $p < .05$

図 2 親密性がペットロス経験に及ぼす影響（単回帰分析結果）

考 察

本研究は、幼児の死の概念の発達について明らかにし、死の概念の発達にはどのような要因が関連するのかを検討し、ペットロス経験による人格的発達について明らかにした。結果として、3 歳～6 歳の幼児の死の概念の発達と年齢との関連はなかった。これは、多くの先行研究が死の概念の発達区分の一つを 5 歳以下（仲村, 1994 ; Safier, 1964 ; et al）または 6 歳以下（Childers, 1971 ; et al）

としてひとくくりにして分析していることに示唆を与え、3歳～6歳の幼児の死の概念の詳細な検討の必要性を示している。死の概念の非可逆性の理解に関連していたのは、ペットロス経験であった。また、3つの死の概念を理解していた幼児9名の全員がペットロスや身近な人の死別を経験していた。このことは、Kane (1979) が6歳以下の幼児の死別経験は死の概念の発達を促進するという結果を支持している。つまり、3歳～6歳の幼児に関しては、ペットや身近な人の死別経験が死の概念の発達を促し、幼児が自分なりに死の原因を考察し、死の経験を詳細に記憶するような実体験となっていたことが示唆された。また、幼児はペットとの死別経験の語りの中で、両親の対応や態度を詳細に記憶していた。例えば、3つの死の概念を理解している幼児の死に関する語りでは、63ヶ月齢の女兒が、犬の死に遭遇したときの悲しみの感情や両親の対応などを詳細に語っていた。また、74か月齢の女兒は猫の死に遭遇した経験を詳細に語り、そのときの母親の様子から感情を読み取ろうとしていた。このように、幼児がペットや動物の死に遭遇したときに周囲の大人がどのような対応をするかが重要であると考えられた。つまり、その動物の死を軽視したり隠したりすることなく悼み、親子で悲しみを共有することが必要であると考えられた。

一方で、両親への質問紙調査の結果から、ペットロス経験による人格的発達については、濱野(2007)の「ペットロス経験による人格的発達」尺度の発達因子と同様の因子構造が見出され、両親は幼児の動物の死別経験は責任感や共感性の発達や情操教育、死を学ぶ機会であると捉えていることが分かった。また、ペットとの親密性が強いほどペットロスを経験したときに人格的に発達すると捉えていたことが明らかされた。しかし、坂田ら(2005)は、両親は子どもが死に遭遇したときに死の事実を伝える必要があると考えながらも困難であるとしているように、本研究でも約7割の親は家庭内で死の教育を行っていなかった。死の教育を行っている家庭の親は、身近なペットの死別経験をういて「いのちの大切さ」を伝えていることが示された。

本研究より、3～6歳の幼児であっても死を理解するのは可能であると考えられ、死の概念の理解にはペットなどの死別経験が影響すると考えられた。一方、両親は、動物の死を経験することは幼児が人格的に発達すると捉えていたことが明らかにされた。このことから、家庭、教育や保育場で「いのちの大切さ」を幼児に伝えるには、ペットや幼稚園で飼育している動物、周りの動物と死別した経験を大人がどのように扱うかが重要であると考えられた。

最後に、子どもは幼少のころから、いのちや死に向き合う準備ができていることが本研究より示唆されたので、幼児に関わる大人も幼児と一緒に死に向き合い一緒に実体験することが「いのちの大切さ」を伝えるために役立つと考えられた。

引用・参考文献

- Childers,P.,Wimmer,M. (1971). The concepts of death in early childhood.*Child Development*, 42,1299-1301.
- Deeken, A.(1983). 特集日本人の死生観・悲嘆のプロセスを通じての人格的成長. *看護展望*, 8 (10), 881-885.

- 濱野佐代子・関根和生. (2005). 幼児と園内飼育動物の関わり－園内動物飼育による幼児の社会性の発達への影響－. *どうぶつと人*, **12**, 46-53.
- 濱野佐代子. (2007). コンパニオンアニマルが人に与える影響－愛着と喪失を中心に－. 博士論文. 白百合女子大学.
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫. (2001). 死別経験による遺族の人間の成長. *死の臨床*, **24(1)**, 69-74.
- Kane, B. (1979). Children's concepts of death. *Journal of Genetic Psychology*, **134**, 141-153.
- Nagy, M. (1948). The Child's theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology*, **73**, 3-27.
- 仲村照子. (1994). 子どもの死の概念. *発達心理学研究*, **5** (1), 61-71.
- Safier, G. (1964). A study in relationships between the life and death concepts in children. *Journal of Genetic Psychology*, **105**, 283-294.
- 坂田和子・牧正興. (2005). Death Education Program の導入時期に関する検討. *福岡女学院大学紀要*, **6**, 23-27.
- Speece, M. W., Brent, S. B. (1984). Children's understanding of death : A review of three components of a death concept. *Child Development*, **55**, 1671-1686.
- 竹中和子・藤田アヤ・尾前優子. (2004). 幼児の死の概念. *呉大学看護学統合研究*, **5(2)**, 24-30.
- 日本発達心理学会監修. (2000). *心理学・倫理ガイドブック*. 有斐閣.

謝 辞

調査にご協力いただきましたS幼稚園の先生や職員の皆様、園児とその保護者の皆様に心よりお礼を申し上げます。また、本研究を行うにあたり助言していただいた、白百合女子大学の御園生直美さんと関根和生さんに感謝申し上げます。また、斉藤史代先生と斉藤綾香さんに厚くお礼申し上げます。